

《書評》

謝冰心著／萩野脩二・牧野格子訳 関西大学出版部

『家族への手紙——謝冰心の文革——』

(立命館大学非常勤講師) 岩崎 菜子

文化大革命（以下文革）については、実に多く言及されてきた。しかし、その渦中に綴られた私信で公開されたものは少ない。本書は、1970年1月から11月にかけて謝冰心が家族に宛てた手紙27通を訳出したものであり、まさにその渦中における証言である（初出は『収獲』2005年第5期）。1年弱の期間に過ぎないとはいえ、ここから以下の3時期の状況を窺い知ることができる。

1. 文化部が湖北省咸寧に設立した五七幹部学校へ下放していた時期（第1信～第14信）
2. 北京へ戻り、湖北省潜江（通称沙洋）の中央民族学院の五七幹部学校へ夫とともに下放されるのを待つ時期（第15信～第20信）
3. 中央民族学院の五七幹部学校に下放していた時期（第21信～第27信）

文化部の五七幹部学校は、作家協会や文聯をはじめ出版社・研究所・図書館・博物館や映画・演劇関連団体などに所属した文化人達の下放先となった。そして、謝冰心は文化部だけでなく中央民族学院の五七幹部学校にも下放しているのである。したがって、本書に収められた書信は、謝冰心研究だけではなく、様々な関心に応えてくれる貴重な一級資料となるであろう。

これらの書信からは、まず、“下放”という特殊な状況下における謝冰心という人の有り様を見ることができる。そして、「われわれは、知識人である前にまず、人なのであり、母／父、祖母／祖父なのである。そういうことが、この手紙を通じてわかることに、そして、こんなに赤裸々に自らをさらけ出しているところに、この手紙の価値がある。この生活に根差した我執と私心が、却って、時代の真実と冰心という女性の真実とを示し

ているのである」「私心は悪であり、罪でさえあった。だが、結局は、私有観念は一掃されなかったのである。その貴重な証言としてこの手紙は残されているといえる」と萩野氏が「解題」で述べておられるように、人間の普遍的な姿をも浮かび上がらせるものとなっている。

「私心」「私有」といっても、必ずしも物欲を意味するわけではない。たしかに謝冰心は、布団を作るために綿花の配給切符などを送ってくれるよう家族に頼み、雨靴・懐中電灯・電池・タオル・魔法瓶・ビニールシートといったものを入手しようと努力する。しかし、自分の最低限の居場所を確保し、その生活空間をできるだけ快適なものにしようとするその姿はむしろ、そうすることが生きとし生けるものの自然な営みであることを物語るにすぎない。

これらの書信において「私心」が強く表れているのは、家族に関することである。文革が始まると、謝冰心夫妻と3人の子供夫婦8人は、下放せられるなどして一時は全員バラバラの地域に暮らしていた。だから謝冰心は、家族のために日用品や食品をこまめに送り、少しでも多くの家族と一緒に暮らせる手立てをあれこれ考えたり、長女が妊娠すれば、長女がいつでも安心して北京へ戻って出産できるように北京の家、それも南向きの家を確保したり、気の置けない家政婦の沈おばさんを雇い続けるために給与を払い続けようと考えたりする。また、長女の子息丹丹は父李志昌とともに江西省の外交部五七幹部学校に下放していたが、都市戸籍に戻ることに難しい農村戸籍に換えられないように手が打たれていたようで、「あの子が北京に戻れるなら、父母が国外にいるやり方に倣って、長期の託児所に入れますか？（第17信）」と提案するなど家族の状況が少しでも好転できるようあれこれと心を砕くのである。

とはいえ、「丹丹に会いたい」といった心情吐露は、単に孫を思いやる心情からだけではない。

「今ますます思うのは丹丹のことです。なぜならあの子の境遇が私とほとんど同じだからです（第6信）」と謝冰心は書いている。同じく下放生活を送っていた丹丹に謝冰心は自身の境遇を重ね、孫を想うことを労働や批判会などに明け暮れる日々の励みとしたのである。

一方、下放生活や政策についての不満はほとんど見られない。昼の労働のほか、夜には小さな椅子を持って10数里（数キロ）歩いて批判会に参加せねばならなかったし、4、5里（2キロ余り）先まで水汲みに行かねばならなかった。咸寧は曇り空が多いために洗濯に困り、湿気が強いので鉄製の懐中電灯は電池漏れし、布団が湿っているので眠るとき氷のように冷たく感じた。そして、武漢へ歯の治療に行った際に1ヶ月ぶりによく入浴したこともわかる。だが、謝冰心はこうした生活の様子を淡々と家族に報告し、「私は体調がよいので、歩く労働は苦勞ではありません（第7信）」「荷物が着かない前でも、何も不満は抱きませんでした。お腹はいっぱいですし、着るものも暖かいです（第9信）」と綴るのである。当時の書信検閲の実態は明らかにされておらず、検閲対策として書かれた可能性も否定できないが、家族を安心させようとする家族への愛を本書から読みとることは間違いではないだろう。

下放は、思想改造や革命精神を鍛えることを目的としていたはずである。だから、「私心を破り公德心を育て上げるのは、本当に並大抵のことではありません（第7信）」と書くとともに、謝冰心は貧農・下層中農のために水汲みなどで貢献をし、同じ幹部学校の人に迷惑をかけないように自力更生しようと努力した。しかし、自身の生活環境を整え、家族の幸せのために努力するという「私心」を一掃することなど不可能であったし、家族を心の支えとすることによって下放させられた日々を生きたことをこれらの書信は見せてくれるのである。

本書には、ところどころに下線が引かれている。付記によれば、これらの書信は分散していた家族の間で回し読みされたもので、下線は謝冰心が手紙を書いた当時に引いたものだという。原載紙に書信1通の写真が白黒で掲載されているが、本書のカバーには第6信（『収獲』誌では第5信。同日に書かれた第5信と第6信が訳書では入れ替えられている）と第25信がカラーで掲載されていて、下線は赤線であったことがわかる。

ところが、この2通の写真に見られる下線は、原載誌及び本書ではすべて省略されている。だが、省略した下線があることや、どのような判断でどの下線を省略したかについて、付記では説明していない。この下線は、下放生活の中で謝冰心が強調したかったことを知ることができるものであり、すべての下線部分の公開が望まれる。

活字化された書信では、「丹丹の様子をもっと教えて下さい（第11信）」といった家族への思慕や、「沙洋に行くのは、大体早くて3月末になりそうです（第13信）」といった連絡事項のほか、以下のようなところに下線が見える。「第一步を踏み出せば、“困難”を1つ1つ克服することなど、ずっとたやすいことです（第1信）」、「私は70歳の年に、1から始めて、人民に役立つ人になろうと決心しました（第2信）」、「これから、絶対に節約せねばなりません。これからのことに適応するために、基礎を打ち立てねばなりません（同）」。

また、表紙カバー掲載の原書信では、「武漢へ行って義歯を入れに行きます（原文は去武昌做牙）」「Daddy（夫呉文藻を指す）のレインコートは見つかりました」といった連絡のほか、「あなたたちが革命的な春節を過ごすことを望んでいます」「つまり、どんなことでも環境に適応しなければならぬということです」などにも下線を見ることができる。この「適応」という言葉は、「鍛錬」「節約」という言葉とともに繰り返し使用されており、原書信が公開された2通以外でも下

線が引かれている可能性は高いだろう。

謝冰心は「この過渡期が長くなるはずはありません（第4信）」「どうぞ体に気をつけて、この時期をやり過ごして下さい（第24信）」とも綴っている。当時何を根拠に過渡期だと判断したのかは定かではない。いつまで続くか不安だったからこそ、こう書いたのかもしれない。「適応しなければならぬ」といった文は、自身のことを述べているのか、家族に求めているのかよくわからない。おそらくその両方なのであろう。謝冰心は自己を「鍛錬」し、環境に「適応」してこの過渡期を乗り切る覚悟を決めると同時に、未体験の状況に困惑する家族を励まそうとしたのであろう。

本書に収められた書信には、“……”で示される削除があり、削除部は50数カ所にも上る。付記によれば、「[]」内の文字は手紙の整理者によって加筆あるいは改訂され、「……」は手紙の整理者の技術的な削除だという。では、手紙の整理者とは誰なのか。本書の付記では「ここでは、冰心の長女の婿・李志昌の手元にあった手紙を整理して、載せる」と訳されている。しかし、この原文は「由冰心的大女婿李志昌根拠原文整理」であり、長女呉冰の夫李志昌が「整理者」であるように読める。

加筆や訂正はもとの語句を見ることができ、ほとんどが誤記の訂正であるが、問題は削除部分である。「解題」注8によれば、手紙の原本は長女呉冰の手元にあり、「プライバシー保護」のため見ることができないという。しかし、家族のプライバシーとは無関係に思える部分の削除も多い。

まず、「雨靴がないといかに不便か思い知らされました。……（第11信）」といった文のあとが削除されているので、こうした削除部分に不満や批判が記述されている可能性は否定できない。

また、例えば第26信に「午前も午後も労働し、夜にはまた会議があります。蚊が多いのです。……しかし、これらすべてのことは予想していた

ことで、鍛錬とはこういう意味なのです」とある。このように好ましくない状況が述べられたあと、削除部に続いて決意などが記されている箇所や、人物評価に関する削除などがどのような文脈で繋がっているのかは、当時の謝冰心の意識を知る上で重要な部分であろう。

このほか、「文藻（謝冰心の夫）はほかの班に配属されるに違いありません。……（第7信）」、「……咸寧幹部学校は病院を建てようとしています（第9信）」「……中央民族学院は多分どこへも学校を移さないでしょう（第24信）」など、配転・移転・建設に関わる部分の削除も見られる。

そして最後の第27信は、夫呉文藻が、長女を北京に戻す件に関して「派遣される部署に限らず、外交部と関係のある職場（非政府組織）を考えてもいいだろう。たとえば呉青の外国語学院や、対外文委員会組織とか……（略）」と加筆して終わっている。まず、「対外文委員会」と訳されているが、原語の「対外文委」は「対外文化聯絡委員会」の略称であることを指摘しておく。また、長女呉冰は59年から72年まで蘭州大学所属であったが、その後次女呉青・陳恕夫妻の勤める北京外語学院（現大学）に移っており、この書信のあと呉冰が北京へ戻る道を探ったことになる。謝冰心夫妻が北京へ配転されるのも、8ヶ月後の71年8月のことである。したがって、謝冰心親子の配転の経緯にも触れた書信が第27信以後に複数存在しているのだろう（書信の内容から、書信の公開された期間中においても非公開の家族宛書信の存在が窺える）。北京外語学院の場合、72年までに全員が下放先から戻されており、政府にとって重要な組織であることを意味している。80年までは外交部の管轄でもあり、呉冰及び呉青夫妻も文革後期に教学のほか翻訳などに従事した可能性は高く、配属先変更の経緯も重要な資料となるであろう。

このように、政策にも関わると考えられる削除もあり、「プライバシー」や付記にいう「技術的

な削除」では説明しきれない。付記では整理者を李志昌としているものの、削除したのは「手紙の整理者」と書き、李志昌とは記していない。李志昌は外交部所属でアイルランド大使など要職にも就いていたので、立場上自ら削除を行った可能性もあるが、上部の指示や『収獲』誌の編集サイドで自己規制のあったことをほかした表現をとったと見ることもできよう。しかし、この書信は下放政策や下放期の実態研究にも資するものであり、中国の知識人が真に文革を「反思」し、今後の中国に生かそうと考えるのであれば、全てを公開すべきではないか。

評者は本誌掲載の拙論（「中央民族学院建校の目的と謝冰心夫妻・費孝通の任務」（上）08年7月号、（下）08年8月号）において、文革後期の謝冰心を含め中央民族学院に配属された知識人が、民族政策や領土を巡る外交政策という重要な国策に関わってきたことを述べた。その視点からは、中央民族学院の幹部学校は文化部の幹部学校より優遇されていたであろうとの仮説が生まれてくる。果たして、中央民族学院の幹部学校に移ったあとの第24信で謝冰心は次のように書いている。「ここの条件は咸寧よりずっと良いです」。「ここは大いに発展しており、機器もととても多いです」。「ここには売店があります。何でもあります。ちり紙、タバコ（“大前門”牌など）、ゴザ、蚊帳、テントの竹ざお、お菓子、醤油、酢などみんなあって、思いがけないことでした」。1500ほどあったと言われる幹部学校だが、中央政府への貢献が見込めるか否かによって待遇が異なっていたことを謝冰心の書信は示している。北京外語学院も好待遇だった可能性は高いだろう。

文革期の知識人については一般に、通称「牛小屋」へ入れられたり、下放させられた被害者としての側面に焦点が当てられるが、指導層のシンクタンクとなった人々もいたものであり、この方面からの研究も文革期の解明に不可欠に思われる。

しかし、中央民族学院に移ってからの手紙には、その状況を述べた内容は極めて少ない。とはいえ、例えば費孝通の長兄宛の書信（『費孝通文集』第7巻、群言出版社、1999年10月所収）を見ると、知識人以外も下放しており、北京への初回の配転者名簿には謝冰心夫妻とともにベテランコック達も混じっていたことがわかる。それは、ニクソン米大統領訪中の準備として『六度の危機』を訳させるために一時的に謝冰心夫妻等を北京へ戻したのではなく、71年夏の段階で、中央民族学院から下放させられていた人々については順次任務に復帰させようとの上部の意向があったことを示すものと言えよう（実際、中央民族学院の幹部学校では73年までに全員が北京へ戻されている）。このように、知識人以外も含めた本書の登場人物の調査を進めることで、当時の具体的施策などを解明することも可能なのではないか。

本書には、牧野氏作成の「謝冰心係累図」が収められており、書信中に登場する親族関係を簡便に知ることができる。また、萩野氏による解題や訳注によって、謝冰心の下放生活だけでなく、下放政策や五七幹部学校についても概観できるものとなっている。

なお、係累図の誤りや誤訳などを訂正した第2版が本年7月末に刊行された。ただ、誤訳を避けようとしたためか直訳的なところも多く、少々読みにくい点が惜しまれる。「原文に書いてないことを記したくはなかった」という訳者の姿勢は評価したいが、中国語を解さない読者層でも関心を持ちうる書であるだけに、第3版が出るのであれば思い切った訳を望みたい。

また、前述のように謝冰心は文革の前期と後期とでは立場が異なっている。したがって、副題に「謝冰心の文革」とあるが、「謝冰心に見る下放」「文革前期における謝冰心」などと時期を限定した方が良かったのではないだろうか。

（2008年2月刊、140ページ、税込2,310円）